

聖書：コリント人への手紙第一 4：14～21

説教題：私に倣う者となって

日時：2022年4月3日（朝拝）

コリント書第一の最初の4章は、コリント教会で生じていた分派の問題を扱っています。1章12節に記されていましたが、彼らは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って互いに争っていました。この問題に関するパウロの最後の言葉が今日の箇所となります。さっそく見て行きますが、パウロは14節で「私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。」と言います。パウロはこれまで結構厳しい言葉を語って来ましたが、たとえば前回の8節でこう言いました。「あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに。」かなり皮肉の効いた言葉でした。その前の7節もそうです。「いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、もらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」これもかなり叱責調です。他にも1～3章の至るところに同じような言葉が満ちていました。皆さんの中にも、まるでパウロに叱られているような気持ちでここまでの言葉を読んで来たと感じる人もいらっしゃるのではないのでしょうか。しかしパウロは言います。私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためであると。つまりこれらは霊的な意味で父の立場にある者としての言葉なのだということです。父は自分の子どもを言うまでもなく愛しますが、「愛する」とは子どもが喜ぶことを何でもしてあげることではありません。子どもがすることを何でも良いよ、良いよと言ってサポートすることではありません。父は独特な立場にあり、他の子どもなら放っておいても、我が子ゆえに、その成長を願って真剣に関わり、時に厳しく叱責することも必要です。15節に「たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人もいる」とあります。養育係とは当時、主人の子どもの世話全般を担当した奴隷のことで、学校の行き帰りの見守りや、行儀作法のしつけなど教育的な働きもしたしもべのことです。「キリストにある養育係が一万人もいる」という言葉でパウロはコリント人の霊的成長のために関わった多くの働き人がいることを認めています。しかし父親は大勢いません。父は一人です。それは

私である！とパウロは言っているわけです。「この私が、・・・あなたがたを生んだのです」とパウロは言っています。これはパウロのコリント宣教によって彼らが信仰へ導かれたことを指します。3章6節に「私が植えて、アポロが水を注ぎました」とありましたように、コリントで最初に福音の種蒔きをし、彼らをキリストへの信仰へと導いたのはパウロでした。もちろん彼はこれによって恩を売ったり、自分を誇っているわけではありません。15節に「福音により」「キリスト・イエスにあって」とありますように、福音に力があること、そして実際に彼らにいのちを与えたのはキリストであることが告白されています。しかし彼らの霊的誕生のために奉仕し、用いられた者として、パウロは自分のことを父と言っているわけです。

この事実に基づいて16節でこう言います。「ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。」 聖書の他の箇所にも出て来ますが、この「私に倣う者となってください」というパウロの言葉は、これを読む私たちにとってとてもチャレンジングな言葉ではないでしょうか。私たちはこう言えるでしょうか。私を見ないでキリストを見てくださいと私たちは言いやすいのですが、パウロはしばしばこのように「私に倣う者となってください」と言いました。しかしこの言葉の解釈のためには、彼が置かれた独特の位置をまず考慮する必要があると思います。彼のここでの勧めは「ですから」という言葉が頭についていますように、先に見たパウロが彼らの霊的父であるという事実に基づいています。子どもは父に倣います。とするなら霊的父であるパウロがコリント人たちに、私に倣う者となれ！と命じたのはある意味で自然であると言えます。そして多くの注解者がコメントしていることは、当時これ以外にコリント人たちが具体的な信仰生活を学ぶあり方は存在しなかったということです。パウロは異邦人世界で宣教しています。そこで救われた異邦人は、では自分たちはどのように信仰生活を送るべきかと考えた時、見習うべき模範はパウロしかありませんでした。まだ新約聖書は書かれておらず、コリント人たちが参照できる規範はありません。彼らが学ぶために見ることができたのはパウロたちの生活のみです。自分たちの霊的親であるパウロたちの姿に倣うしかなかったのです。これはもちろんパウロの言葉の癖とか、彼の見た目や風貌も含めたすべてを真似せよということではありません。パウロは後に11章1節でこう言います。「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」 ですから大事なことはキリストに倣うことです。しかしコリント人たちはキリストを見たことはありませんし、キリストのことをまだよく知りません。ですからキリストに倣うためには、キリストを良く知り、キリストを

倣っているパウロを見て、その彼に倣うしかないのです。

倣うべき生活は具体的に何かについては、前後関係や今参照した 11 章 1 節から伺い知ることができます。キリストに倣っていると語るパウロたちの歩みは、前回見た 9～13 節に良く示されていました。そこに記されていることはみなキリストの姿を彷彿とさせるものでした。9 節の「死罪が決まった者のように、最後の出場者として引き出されて、皆の見世物となった」のは何よりもキリストでしたし、10 節の、世から愚かと思われ、弱く見られ、卑しめられたのはキリストでした。11 節以降の「飢え、渇き、着る物もなく～」もみなキリストに当てはまりますし、12 節中盤の「ののしられては祝福し～」以下もそうです。そして 13 節最後の「この世の屑、あらゆるもののかす」とは誰よりもキリストのことでした。使徒たちはまさにキリストに倣って歩んでいました。その私たちにあなたがたも倣ってくださいとパウロは言っているわけです。

この時のコリント人たちはそれとは反対に、この世の価値観に立って、この世と一緒に十字架を卑しいものとして退け、むしろこの世の称賛やこの世の栄光、この世の地位を求めて歩んでいました。そして自分と異なる立場の人と争い、妬み合い、教会の中に分派を持ち込んでいました。そうであってはならないということです。キリストに倣うとは、十字架につけられたキリストに従うこと、そのキリストに倣っている使徒たちの姿に倣うことです。嫌なこと、苦しいこと、面倒なことは使徒たちに任せて、自分たちは美味しいところだけを！という考えでいてはいけません。もちろん人それぞれに賜物と召しは異なり、皆が使徒ではありません。しかしそれぞれが置かれたところで十字架につけられたキリストに従うという歩みは共通のものであるはずで、たとえ世の視点からすれば、この世の屑やあらゆるもののかすと見なされる立場でも、神の視点からすれば、それはキリストの足跡に従うこの上ない栄誉ある道です。その道こそを選び取って歩むように！とパウロは言っているわけです。

そのために「あなたがたのところにテモテを送りました」と 17 節に続きます。テモテはパウロが愛する、主にあって忠実な子、パウロの最愛の愛弟子です。その彼をパウロはすでにコリントに遣わしていました（使徒の働き 19 章 22 節）。テモテはパウロの霊的な子としてパウロを映し出す人でした。性格的にはパウロと随分異なるところもあったことが聖書から伺えますが、キリストに倣い、キリストを映し出す生き

方の本質においてはパウロをコピーしたような人でした。その彼が、私の生き方を、生ける見本となってあなたがたに思い起こさせてくれるだろうとパウロは言います。その生き方に倣いなさいと言います。

今日の箇所後半となる 18 節以降では再び厳しい調子の言葉が語られます。18 節によると、パウロがコリントに行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいたようです。彼らは、どうせパウロは来ないだろう、来る気はないだろう、あるいは来れないだろうとさえ考えていたようです。今や自分たちの方がレベルの高い人間になったと誇っていた彼らは、パウロは恐れをなしてコリントに顔を見せることはないだろうと踏んでいたようです。そんな彼らに対してパウロは 19 節で「しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところに行きます。」と言います。パウロはコリントに行く計画を立てていました。16 章 5～7 節：「私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、おそらく、あなたがたのところ滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです。私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところしばらく滞在したいと願っています。」しかしパウロの行動の基準はいつも主の御心でした。その主の御心に従い、今しばらくエペソにいる必要があると判断していたことが、今の続き（8 節以降）に記されています。しかし主が良しとされるなら、すぐにでも行くとパウロは言います。いつ行けるか、はっきりしない面があるものの、確実に行くという意味で「すぐにでも」と彼は言ったのでしょう。

そして 19 節後半と 20 節でこう言います。「思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。神の国は、ことばではなく力にあるのです。」ここで「ことば」と「力」が対比されていますが、これがどういう意味で語られているかについては、二つの言葉が一緒に出て来た 2 章 1～5 節を振り返ると分かりやすいと思います。そこから分かることは、「ことば」とは 2 章 1 節の「すぐれたことば」、4 節の「説得力のある知恵のことば」と関係すること、すなわちコリント人たちが誇っていた雄弁術、ギリシャ世界で高く評価された哲学的表現を指すということです。一方の「力」とは、4 節に「御霊と御力の現れ」とありますように聖霊と関係し、また 5 節に「神の力」とありますように十字架につけられたキリストの宣教に伴って現れた神の力を指します。つまりパウロがここで問うていることは、聖霊の生きた働き

の現れがあなたがたに見られるかということです。コリント人たちは人間的な雄弁さや、人に強いインパクトを与える言葉の力強さを誇り、パウロたちを見下げていました。しかしそれは神の国とは関係がない。やがての天国へとつながる神の国・神の支配は、人間的な言葉の巧みさ・卓越さとは関係がなく、聖霊の力とその現れに関係するということです。コリント人たちが見下げていたパウロの宣教によってコリント人たちは実際に回心し、救いへ導かれました。また聖霊に導かれている人々は成長し、与えられた賜物を正しく用いて、益々キリストに似た者へと造り変えられるはずでしょう。そういう聖霊の力の現れが見られるかということです。それを見せてもらいましょう！とパウロは言います。それがなければ、いくらことばや知恵を誇っても、それは空しいものでしかないということです。聖霊のみわざとしての実が求められるということです。

最後の21節でパウロは「あなたがたはどちらを望みますか」と言います。「むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。」と。鞭を持って行くとは、怒りの心を持ち、厳しく懲らしめる意図を持って行くということです。具体的には戒規の執行ともつながるのでしょうか。一方の愛と柔和な心で行くとは、喜びを持ち、交わりを楽しみにしてということでしょう。もちろんむちを持って父がやって来ることを望む子どもはいません。後者の関係が望ましいのです。しかしたとえ前者であっても、それはわが子に対する父の愛による行動であることには変わりありません。このように私たちはここにコリント人たちに何とかして正しい方向へ成長してほしいと願う父の立場にあるパウロの苦心、労苦の程を見ます。厳しい言葉をこれまで語り、場合によってはこの後、むちを持って行かなければならないかもしれない。しかし願わくは愛をもって柔和な心で行きたい。キリストにあつて父の立場を引き受け、コリント人のためにこのように心を注ぎ、仕えているパウロの姿から多くのことを教えられます。

以上、今日のまとめとして二つのことを最後に心に留めたいと思います。一つは「私に倣う者となってください」というパウロの言葉についてです。これはパウロの独特な立場と深い関係のある言葉であることを見て来ました。しかしそこにはやはり私たちにも適用できる原則があると見るべきではないでしょうか。それは霊的親とまではいかなくとも、先に信仰へと導かれた者たちは後に続く者たちに模範を示せる者でなくてはならないということです。キリスト教はただ教えを信じて終わりではなく、そ

の信じた教えは具体的な生活に現れ出なければなりません。ですから私たちはその生活とセットで福音を伝えて行く必要があることとなります。私たちも実際これまで、自分の霊的親にあたる人から、あるいは信仰の先輩方、特に年長の兄弟姉妹の姿から、信仰生活について多くのことを教えられて来たのではないのでしょうか。信じた福音をどう生きるか、どのような生活に現わしていくべきか学び、導かれて来たのではないのでしょうか。とするなら私たちもまた他の人にとって、特にこれから信じる人々にとって、「私に倣う者となってください」と言えるような者となることを目指して行かなければならないのではないのでしょうか。もちろんこれは完璧な人になるとか誤りが無い人間になるということではありません。大切なことは誤ることがあっても、キリストにあって生きていくこと、私の生活の中にキリストが見えるということです。私たちは自分の信仰生活が単に自分のためだけのものではなく、周りの方々の霊的成長のための励ましや模範ともなるべきものであること、神がそう意図しておられることを覚えて、そのように生きる者となることを祈り求める者とされたいと思います。

そしてもう一つは、私の生活の中にキリストが見えるために大切なことは自分自身がまずキリストに倣う歩みをする事、特にそれは十字架につけられたキリストに倣うことであるということです。それは 10～13 節で見た道に行くことです。私たちの前にも二つの道があります。一つはコリント人のように、この世の称賛やこの世の栄光、この世の地位を求めて、この世が蔑むものを一緒に蔑むこと、特にキリストの十字架を恥ずかしく思い、これを自分から遠ざけて歩むことです。もう一つはキリストに倣う使徒たちのように、十字架につけられたキリストを誇りとし、キリストの足跡に従う歩み、キリストに倣って仕える歩みに進むことです。賜物や召しはそれぞれ違いますが、それぞれの立場でそのように歩むことです。神が招いておられ、また祝福して下さるのはこの後者の歩みです。そちらにこそ聖霊の力と神の国の現れがあると言われていています。私たちは新年度もともにこの道を選び取って、キリストを益々知り、キリストを味わい、キリストに感謝し、キリストを映し出す歩みをする者へと導かれたいと思います。その歩みがお互いにとっての良き励まし、また模範として用いられますように。その生き方において神の力を豊かに体験させられ、神の国の祝福を宣べ広める教会の歩みを導かれて行きたいと思います。